

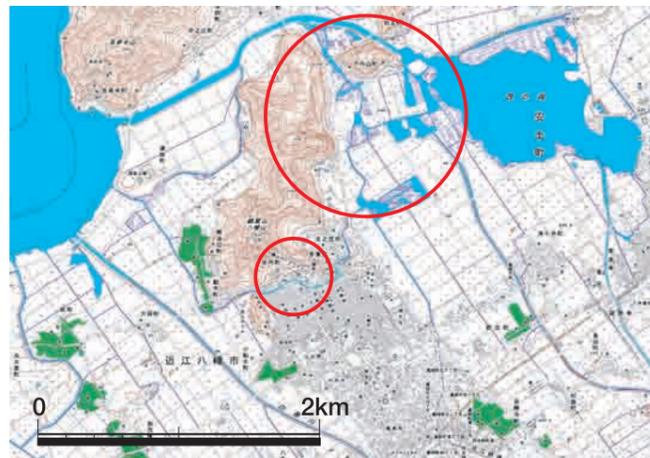
周辺の
みどころ

安土城の廃城後、湖東方面の要として、天正13年(1585)に豊臣秀次が築城。標高284m余りの八幡山山頂に築かれた城郭部分と、山麓に築かれた居館部分により構成される。総石垣の城郭で、近世城郭の先駆けとして貴重である。城の北は琵琶湖に面し、外堀として開削された八幡堀により城下と結ばれている。

現在、本丸跡には秀次の菩提寺村雲瑞流寺が建立されている。麓からロープウェイを利用すれば、簡単に、眼下に広がる西の湖や琵琶湖の景観を堪能することができる。



八幡山城秀次館の石垣



【アクセス】

- JR 琵琶湖線近江八幡下車、バスで円山・白王口下車

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】
(関連文献/関連施設)

- 安土・八幡の文化的景観保存活用委員会『安土・八幡の文化的景観保存活用事業報告書』

近江八幡の水郷

近江八幡市白王町・円山町ほか



夕暮れの西の湖

かつて、琵琶湖の回りには大小の内湖がたくさんあった。その多くが失われてしまった中であって、現在残された最大の内湖が「西の湖」である。

ここには、漁業やヨシ産業等、周辺に暮らす人々の生業を通し、自然との人とが共生し、この元で、豊かな恵み、自然、そして景観の維持・再生が繰り返されてきた。

また、ここに繋がる八幡堀からは、近江商人達が全国に羽ばたいていった。





西の湖と琵琶湖

近江八幡の水郷

所在地 近江八幡市白王町・円山町ほか

琵琶湖最大の内湖「西の湖」

内湖とは、もともと琵琶湖であった部分が、様々な作用で琵琶湖から切り離された湖沼で、昭和の初期には大小40箇所余りがあった。しかし、戦後の食糧増産のためその多くが干拓され、現在23箇所が残されているに過ぎない。

この様な中であって、安土町と近江八幡市にまたがる西の湖は、残された最大の内湖である。

近年、内湖が魚類の繁殖や水質の浄化に果たしてきた役割が見直され、その復元等も検討されてきている。

西の湖のヨシ原

西の湖の周辺には、広大なヨシ原が広がり、これを利用したヨシ産業が営まれてきた。良質のヨシの生産地として知られる西の湖周辺であるが、自然状態では良質のヨシは生育しない。刈り取りや、ヨシ刈り後の火入れ等、人手を入れることにより、ヨシが再生するのである。

現在、外国産の安価なヨシが流入し、西の湖のヨシは高級夏用建具の生産に特化しなければならない状況となり、製造業者も減少しつつある。しかし、初刈りしたヨシを立てる「刈り始め」や、ヨシの芽吹きを促進させるための「ヨシ地焼き」、刈り取ったヨシを乾燥させるためにヨシを円錐状に立てる「丸立て」等、今なお、ヨシ産業に根付いた独特の景観が残されている。

このような、ヨシ原に代表される環境や景観が、ヨシ産業やこの周辺で暮らす人々との生活と共生しながら維持・再生してきたことが高く評価され、平成18年、我が国で最初の「重要文化的景観」に選定された。

水郷の景観

西の湖とこの南に広がる「北之庄沢」と呼ばれる沼地の周辺には、多くの水路が張り巡らされ、耕作やヨシ栽培の通路として機能してきた。当然のことながら、移動の手段は手



水郷めぐりの船と西の湖



八幡堀



和船の廃材をリサイクルした蔵の腰板

漕ぎの船である。

近年、手漕ぎ和船による水郷巡りが、多くの人々の心を惹き付けている。展開する四季折々の美しい景観もさることながら、余りにも早く時を刻む機械的時間に傷ついた人々の心を、人力による、ゆったりとした自然の時間の流れが癒しているのかもしれない。

八幡堀

八幡堀は、西の湖に繋がる人工の運河である。もとは豊臣秀次が築城した八幡山城の外堀として開削されたが、廃城後、湖東方面の物資を大津に運ぶための運河として利用され、近江商人達の活躍を支えた。現在の近江八幡市は、八幡堀の東に展開する近江商人の街である八幡町が母体となっている。